TOUHOKU CONSTRUCTION ENGINEER STORY

# 技術者物語

創刊号
2013
Spring

東北建設業青年会

2013
Spring

CONTENTS

技術者物語　創刊号


02　青森　一番なりたくない職業だった
山内土木株式会社
取締役営業部担当　四ッ谷 信光さん

04　岩手　他の業界にはない達成感がある
株式会社 平野組
土木部第二課　佐藤 博幸さん

06　宮城　身近な人の役に立つ仕事をしたい
後藤工業株式会社
工事部主任　阿部 一善さん

08　秋田　自分のつくった道路を地図に
株式会社 大沼組
工務部工務課　高橋 大志さん

10　山形　地域の安全・安心を守る仕事に誇り
株式会社 三浦土建
常務取締役　中崎 敏幸さん

12　福島　愛する地域の復興に全力尽くす
庄司建設工業株式会社
相馬営業所係長　鈴木 善行さん

## 創刊にあたって




東北建設業青年会
会長
須田 光宏


# ～地域建設業の輝かしい未来へ～

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災より2年が経過いたしました。

振り返りますと、私たち地域建設業は、震災直後から自ら被災しながらも、ライフラインの遮断・途絶を始め、落橋や道路の寸断などにより集落が孤立する事態の中での救援・復旧作業、さらに大量のがれきが沿岸部一帯を覆い尽くす過酷な環境下において、道路啓開から応急対応、住民の安全避難、炊き出しなど、まさにかつて経験したことのない、様々な震災対応に尽力して参りました。

地域建設業が資機材と人員能力を有し、地域に生き、地域を理解し、地域を愛する技術集団として、「地域の安全・安心」を守るという大きな使命感を持っていたからであります。

このような地域建設業の迅速な活動によって、警察や自衛隊による人命救助活動、被災者の方々への避難生活支援など、行政機関が被災地において実施する活動がスムーズに進めることが出来ました。

私たちは、①地域の安全・安心を守る公共構造物の提供、維持・管理②地震、豪雨・豪雪などの防災と災害発生時における応急復旧支援③地域は地域で守るという意識の下での社会貢献活動④地域における雇用の創出・受け皿と納税義務という4つの使命を課せられた危機管理産業としての認識を持って業務に精励しております。

千年に一度と言われる大災害から、この2年間の我々の仲間の献身的な活動によって、着実に復旧・復興が進んでおります。各方面より建設産業の役割及び責任の重さが再認識されたところであります。

建設産業への入職を希望している若者には、地域建設企業および技術者に親しみを持ってもらうことで、地域において地元建設企業が果たしている役割の大きさ・重要性を認識頂き、技術継承・伝承の必要性を理解していただくため、技術者物語を発刊することと致しました。

私たち地域建設業は、世界に誇れる復興のため邁進して参ります。

皆さんも、是非私たちの仲間になって地域建設業の輝かしい未来へ向かってスタートしましょう。

# 青森
# 一番なりたくない職業だった

## 山内土木株式会社

取締役営業部担当
**四ッ谷　信光**さん

本社　〒035-0084 青森県むつ市大湊新町 37－12
TEL 0175－24－2231　FAX 0175－29－2301
URL http://www.yamauchi-doboku.jp/

技術者物語

### 「家族が離れ離れ」でマイナスイメージ

「一番なりたくない職業に就いてしまった」。現在、会社の経営に携わる取締役にまで上った四ッ谷さんから思い掛けない一言が飛び出した。なぜなのか。

四ッ谷さんは、高度経済成長期まっただ中の1959年、むつ市内で生まれた。両親は稲作の兼業農家を営んでいたが家庭は貧しく、農閑期には揃って北海道などに建設現場の作業員として出稼ぎに出掛けていたため、幼い頃は「祖父母が親だと思っていた」という。こうした背景から、建設業に対し「家族が離れ離れに暮らさなければならない仕事」という負のイメージがあった。

成績優秀だった四ッ谷さんは大学進学を夢見ていたが、「苦しい家計を助けるため、高校を出たら働かなければ」と、地元の青森県立むつ工業高校に入学した。卒業後は大手鉄鋼メーカーに入社し県外に赴任したが、ほどなく中国転勤の噂が浮上。「両親の面倒をみなければならない」事情と、生まれ育った地元への郷愁から約１年で退社し、地元の家電販売店に勤務。そうした中、高校時代の恩師から山内土木への入社を打診された。

### 忙しさピークで「大失敗」

建設業に対する幼少時の印象は残っていたが、恩師の推薦であり、かつ家計を支えるため「今より給料が高いほうがいい」と覚悟を決めて入社した。

ところが当時は「給料が良いというのは大きな間違い」。しかも、まさにバブル経済の全盛期であり、何よりも日曜日すら休めない忙しさが心身に堪えた。「大失敗だった。何度もやめようと思った」と振り返る。

現在は経営幹部としてデスクワークも重要な仕事だ。パソコンは得意分野だ

「家族を養うために続けていた」が、忙しさがピークを極めた1998年のある日、上司の前で思わず「やめる」との愚痴が出た。売り言葉に買い言葉で「やめろ」と返された。辞職を決意した翌日、事務所で残務処理に当たっていた四ッ谷さんの前に、口論相手の沢尻宏太郎常務（当時）が現れ「悪かった」と頭を下げた。「あの一言がなかったら辞めていた。続けられたのは良い先輩達に恵まれたことも大きい」と温かみのある社風が四ッ谷さんと会社との縁をつないだ。

### 技術者として成長「おもしろくなってきた」

仕事はきつかったが、入社５～６年で現場を任されるようになり、海上工事を除くあらゆる土木現場をマネジメントしていく中で技術者として力量が備わり「仕事がおもしろくなってきた」のもこの頃だ。

「力が付いてくれば発言力も高まるし、例えば何もなかった場所に橋が完成すれば出来た、という感慨があり、地域の人も喜んでくれる。何とも言えない達成感があった」。

思い出すシーンがある。父親が若い頃、出稼ぎ仲間と酒を酌み交わしながら「俺達は地図に残る仕事をしている」と誇らしげに話す姿だ。技術者としての仕事に目覚めた自らと重なった。

道路、橋梁、砂防、護岸……。手掛けた数多くの現場の中でも特に印象深いのが、県内で初めて地元単独で施工した浄化施設・『川内町下水浄化センター』だという。

24年間の現場生活を卒業し、取締役として営業活動に奔走する現在も「建設会社で最も大事なのは現場」と、足繁く各地の現場を訪問。発注者に状況を伝え、時には自らの経験を踏まえて助言もし、信頼を得ている。

### 「自慢できる仕事」天職に

「入社してから33年間を振り返ると、自慢できる仕事をしてきたと改めて感じる」。あれほど嫌っていた建設業は、人に誇れる天職に変わった。

地元企業のため転勤も、もちろん出稼ぎもなく、家族とはずっと一緒。休日も月に６～８日あり、機械化の進展で人力施工も激減するなど、作業環境は格段に改善され、「昔に比べたら天国」になった。

そんな〝自慢できる仕事〟に、「これからの若い人が１人でも多く興味を持ってくれたら嬉しい」と、若者がどんどんチャレンジしてくれることを願っている。

宴席で沢尻常務と。口論を経て絆はさらに深まった

### 思い出の現場

GOOD JOB!

**川内町浄化センター**
**水処理施設土木建築工事**

他の浄化センターを目にする度に「いつかやってみたい」と思いを馳せていた。地元企業が単独で下水浄化センターを施工するのは青森県で初めてだったという。パソコン普及前だったが個人的に好きだったため、当時は誰もが敬遠するCADでの施工図作りをできることが楽しかったそうだ。

# 岩手

## 他の業界にはない達成感がある

### 株式会社 平野組

土木部第二課

**佐藤　博幸**さん

本社　〒021-8555 岩手県一関市竹山町6-4
TEL 0191-26-3711　FAX 0191-26-3718
URL http://www.hiranogumi.co.jp/

技術者物語

### 技術者の道、きっかけは恩師の勧め

佐藤さんは岩手県花泉町（現一関市）に生まれ、高校卒業まで過ごした。小学校から中学・高校まで軟式野球に打ち込んだ。「家でじっとしているのが嫌で、野球ばかりしていた」と振り返る。

数学が得意だったこともあり、高校は理数科に進んだ。「大学も理科系に」ということだけは決めていたが、どの分野を選択しようか受験のぎりぎりまで迷っていた。

そんな折に担任教師から『君の家は農家だから、土木系の学科にしたらどうだ』と勧められた。結果的に入学したのは、東北学院大学工学部土木工学科（現環境建設工学科）。「建設会社に就職しようなんて考えもせず、ただ単に先生の勧めに乗っかっただけ」だった。

大学ではコンクリート工学や水理学などを勉強したが「ちんぷんかんぷんで、単位を取るのがやっと。測量の実習も工業高校からきた同級生が手際よくやっているのを見て感心していた」という。

そうこうしているうちに大学4年の春、就職活動の時期を迎えた。まわりの友人が建設会社への就職が決まっていく中で進路を決めかねていた。「建設会社に入るにしても、一関にはまだ帰りたくない」と思い、研究室の教授に中央ゼネコンへの推薦を相談した。

候補として3社をあげてもらい、入社試験を受けようとしていた矢先、父親から「一関に帰って来い」と言われ、そこから急きょ地元の会社を探し始めた。

### 地元への就職かなうも直後「失敗した」

平野組への就職を希望したのは「大きな会社だからスケールの大きい仕事ができるだろうというイメージと、ほかの地元建設企業よりも待遇が良かった」からだ。

一関市内の下水道工事現場で作業員に指示を出す佐藤さん（左から2人目）

朝礼の模様。当日の作業内容や手順を確認することで安全を確保する

願いがかなって同社に入社できたものの「入社して2、3カ月で失敗した」と思った。「毎日、寒空の下で測量のための杭打ちばかりしていた。心身とも疲れ、この業界でやっていけるか心配になった」。

仕事に対する意識が変わったのは、入社した翌年の冬に携わった林道工事の現場。悪天候を始め、さまざまな悪条件が重なったため、ほぼ3カ月間、休みなく働いた。「工期ぎりぎりで完成できた達成感が大きかった。一方で、自分が現場を持つなら、もっと余裕のある現場にしたい」と思った。

初めて現場を任されたのは入社3年目。一関市内の下水道工事だった。「現場代理人（所長）や監理技術者は、自分の思いを作業員に伝え、構造物をつくっていく仕事。作業員の中には自分の親より年配の人もおり、最初は思いの伝え方が下手でうまくいかなかった」。

それでも人付き合いが好きな性格が功を奏し、年配の作業員とコミュニケーションを取るのにそれほど時間は掛からなかった。

### 危険と隣り合わせの災害復旧工事

最も思い出深い現場は、2008年6月に発生した岩手・宮城内陸地震後の産女（うぶすめ）川地区土砂災害緊急復旧工事。川の中に崩落した土砂を緊急的に取り除く工事で、現場代理人に抜擢された。土砂を取り除かなければ土石流となって下流に流れ込み、大惨事となる。

「土を取るだけの工事だったが、簡単そうで難しかった。雨が降ればまた川に土が落ち、現場自体も土石流に襲われる危険性があった」。

それだけに現場の安全確保には完璧さが求められた。発注者とは1日3回の打ち合わせがあり、リアルタイムで対応を報告。問題点があると夜遅くまで対策を考えた。「とにかく無我夢中だった。逃げ出したい気持ちもあったが、ここでへこたれたらすべてがダメになると思ってやり遂げた」と当時を懐かしむ。

### 経験積むほどに増えていく人脈（財産）

現場経験を積む度に増えていく人脈は、佐藤さんにとって大きな財産だ。「困った時はみんなが協力してくれる。人付き合いの濃さは、建設業界ならではないか」と話す。

自らの経験から建設業を志す学生には「幅広い人脈ができ、ほかの業界では味わえない達成感がある」と魅力を訴える。

思い出の現場

### 産女川地区土砂災害緊急復旧工事

GOOD JOB!

2008年6月14日の岩手・宮城内陸地震で土石流が発生した一関市の産女（うぶすめ）川上流地区。川の中の土砂を緊急的に撤去する工事を請け負ったが、「簡単そうで難しかった」と話す。2次災害の危険と隣り合わせだったこともあり徹底した安全管理を求められた。「無我夢中だった」と一言。

技術者物語

# 宮城

## 身近な人の役に立つ仕事をしたい

### 後藤工業株式会社

工事部主任

**阿部　一善**さん

本社　〒983－0034 宮城県仙台市宮城野区扇町 4－6－4
TEL 022－284－9069　FAX 022－284－9317
URL http://www.gotoh-i.co.jp/

### スケールの大きい土木に魅力

就職を前に「身近な人の役に立つ職業に就きたい」と考えていた。

阿部さんは、宮城県大和町に生まれ、地元の小中学校に通った。サッカーやバスケットなどのスポーツに励む一方で、〝機械いじり〟が好きな少年だった。「何かをばらしては組み立てることに夢中になった。元に戻せないこともあった」と笑う。

仙台市内の普通科高校を卒業し、東北学院大学工学部土木工学科（現環境建設工学科）に入学。受験では機械や建築学科も合格したが、土木を選んだ。「漠然とものづくりに携われる仕事をしたいと思っていただけで、土木に対して特別なこだわりはなかった。ただ、機械より建築、建築よりも土木の方がスケールの大きいものがつくれそうで魅力的だった」

そして、就職時に選択したのは地元の建設会社だった。「家族や友人など、身近な人たちに使ってもらえるもの（構造物）をつくりたいと思った。中央ゼネコンと違って、ずっと県内で仕事ができる地元企業を選んだ」という。

最初に携わった造成工事の現場では、測量の手伝いや作業員のスケジュール管理などを担当した。「入社したての新人に仕事を任せてくれる現場所長だった。その分、苦労も多かったが、工事が完成した時の充実感も大きかった」と振り返る。

こうして技術者としての経験を積み、後藤工業に約 8 年前に入社した。宮城県名取市内の国道 4 号線の横断函渠（ボックスカルバート）の工事を皮切りに、現場代理人（所長）や監理技術者として現場の第一線で活躍している。

重機やトラックの動きに目配せするのも技術者の仕事だ

### 初めての所長で責任感とやりがい

初めて所長を務めた現場の請負金額は約 2 億円。当時 28歳だった阿部さんにとっては、途方もなく大きな金額に思えた。「工事をこなすだけでなく、利益を出すための現場運営・管理も求められるため、所長になる前とは責任感がまったく違った。それでも大変さより、やりがいを感じた」

思い出の現場は、宮城県大衡村の国道 4 号拡幅に伴う橋梁下部工の工事。「現場が実家のすぐ近くだったこともあり、親や友人が『工事が進んでいるね』『この橋ができれば便利になるね』と声を掛けてくれた。身近な人の役に立ちたいという目標が少し達成できたと思った」

### 震災復興に建設業の使命感

2011年 3 月11日に発生した東日本大震災の当日は、大衡村の別の道路工事現場にいた。地震から 2、3 日たって被災状況が少しずつわかり始め、会社から名取川の堤防補修や山元町の防潮堤の応急復旧などを手伝うよう指示を受けた。

「最初に行った名取川の河口の悲惨な光景が忘れられない」。想像を絶する光景に大きな衝撃を受けたが、技術者としての使命を全う。「がれきが片付けられ、これからが本当の復興になる。被災者が元の生活に戻れるように住宅や道路、河川などを整備するのはわれわれ建設業の仕事。地元の人たちのためにこれからも頑張りたい」と決意している。

### きついほどに得られる達成感

通常の工事も復旧・復興工事も決して楽な仕事ではないが「きつければきついほど、できあがった時の達成感が大きく、本当にやりがいがある」ときっぱり。

建設技術者を志す学生に対しては「建設業は、公共事業予算も削減され、あまり良いイメージを持たれていないかもしれないが、自分のつくった施設が半永久的に残る。他の産業にはない魅力があり、自信をもっておすすめしたい」と話す。

ある休日、小学生の息子が阿部さんに「ここはパパがつくった橋だよね」と呼び掛ける。自宅近くにある東北縦貫自動車道の富谷ジャンクションのランプ橋だ。「うん、そうだよ」と誇らしげにほほ笑む阿部さんの姿がそこにある。

コンクリートのひび割れ調査をしている阿部さん

思い出の現場

### 大衡構造物工事

GOOD JOB!

宮城県大衡村を走る国道 4 号を拡幅するため、新たにつくる橋の下部工工事。現場が実家から近かったため、親や友人・知人の車がよく通った。中には励ましの言葉をかけてくれる人もいて、「この人たちのために頑張ろう」と思った。身近な人の役に立つことが技術者を志した一番の理由だ。

技術者物語

# 秋田

## 自分のつくった道路を地図に

**株式会社 大沼組**

工務部工務課

**高橋 大志**さん

本社 〒015-0202 秋田県由利本荘市東由利蔵字蔵 113-2
TEL 0184-69-2425 FAX 0184-69-2427
URL http://www.onumagumi.co.jp/

### 建設業の道を志した中学３年の夏

「自分が建設に携わった道路が載った地図を見てみたい」。入社12年の高橋さんの目下の目標だ。

高橋さんは、秋田県本荘市（現由利本荘市）に生まれ育ち、現在も実家に住んでいる。小学生の頃は、デパートの店員にあこがれた。「おもちゃに囲まれながら仕事ができれば幸せ」と考えたからだ。

そんな無邪気な少年だった高橋さんが職業を決めるのは早かった。中学３年の夏、登下校時に工事現場で働く作業員を見て、「自分も体を動かしてお金がもらえる仕事に就きたい」と思った。

近くの工業高校には土木学科がなかったこともあり、土木の授業が選択できる秋田県立西目高等学校総合学科に入学。測量の基礎や生コンクリートづくり、土質試験、手書きの製図などを学ぶうち「自分の職業にしたい」と改めて願った。

### 自分で選んだ仕事、頑張り抜く

「実家から通える建設会社に就職したい」との思いから、県外企業は選択肢から外し、地元企業数社の試験を受け、大沼組への就職が決まった。

最初に携わった現場は、国道改良工事。そこで先輩から測量技術や工事写真の撮影方法などを教えてもらった。現場で未成年なのは高橋さんぐらいで、みんな年上の人たちばかり。中には自分の親よりも年配の作業員もいた。「厳しくも優しく仕事を教えてくれた」と振り返る。

仕事は思っていた以上に大変だった。例えば切土や盛土の目安となる丁張りを現場で計算するように言われても、パソコンが今ほど普及していなかったため、難しくてできなかった。それでも「自分で選んだ仕事。とにかく頑張ろう」と必死で取り組んだ。

測量は工事の基本。入社後、最初に教わるのも測量技術だ

作業所での安全教育の一コマ。教える相手は年上ばかりだ

努力の甲斐もあり、一通りの仕事ができるようになった入社３年目に河川改修工事の担当技術者に就いた。橋の上・下部工や舗装工事、護岸工事など、さまざまな工種を含んだ現場で段取りを覚えるのに苦労した。

### 初めての現場代理人で仕事にやりがい

その後も担当技術者として経験を積んでいた入社８年目のある日、会社から河川維持修繕工事の現場代理人（所長）を命じられた。

幸い、数年前から同じ現場で担当技術者を務めていたため、作業員は顔なじみばかり。「気心が知れた人たちだったので、仕事はやりやすかった」ものの「指示された仕事をやるのではなく、自分で仕事や現場のペースをつくり、効率よく作業を進めていかなければならない」ことに苦心した。

一方でやりがいもあった。河川の維持修繕工事は堤防の除草や巡視・巡回、法面補修などが中心だが、発注者から指示された仕事だけではなかなか利益が上げられない。このため、受注者が現場を入念にチェックし、不具合があれば発注者と協議の上で補修する。「仕事を受けるだけでなく、仕事をつくれる工事。現場代理人はその責任者なので、やりがいを感じた」という。

### 24時間態勢で緊急応急復旧を実施

思い出の現場は、約２年前に現場代理人を務めていた子吉川地区維持工事だ。2011年６月に大雨が降り、子吉川が氾濫したため、発注者である国土交通省から緊急応急復旧の要請を受けた。２週間、24時間態勢で堤防の復旧工事を進め、約１カ月で完成させた。

「24 時間態勢での緊急復旧は初めてだったので、戸惑いもあったが、なんとか早期に復旧できた。地域の人たちに『早く直してくれて、ありがとうね』と声を掛けてもらったことがうれしかった」。

未曽有の被害をもたらした東日本大震災の当日は、現場研修で静岡県浜松市にいた。テレビから伝わってくる惨状に言葉を失った。地域の安全・安心を担う技術者として「機会があれば自分の技術を生かし、復興の力になりたい」と力を込める。

これから建設業への就職を目指す学生に対しては「つらいこともあるが、それを乗り越えて工事が完成した時の喜びは何ものにも代え難い。ぜひ、同じ喜びを味わってほしい」と呼び掛ける。

思い出の現場

GOOD JOB!

### 子吉川地区維持工事

2011 年６月の大雨で子吉川の堤防が決壊したため、24時間態勢で応急復旧に当たった。テレビや新聞に取り上げられることはなかったが、地域の人たちの「早く直してくれてありがとう」という感謝の言葉がうれしかった。「自分の仕事を見てくれている人がいる」ことを実感した。

# 山形

## 地域の安全・安心を守る仕事に誇り

### 株式会社　三浦土建

常務取締役

**中崎　敏幸**さん

本社　〒997-1124 山形県鶴岡市大山 3-23-38
TEL 0235-33-2158　FAX 0235-33-0113

技術者物語

### 岡山に生まれ、関西の建設会社に就職

岡山県に生まれ、大学卒業まで中国地方で過ごした中崎さんが、山形県鶴岡市で地域のインフラ整備に汗を流している。全国を渡り歩く生活から、地域に生き、地域を守る技術者として――。

中崎さんは瀬戸内海に面した漁師町の日生町（現備前市）に生まれた。中学から大学までテニス部に所属し、〝テニス三昧〟の日々を送った。歴史に興味があったこともあり、中学生の時は、「将来は社会科の先生になりたい」と思っていた。

しかし、大学受験で選んだのは鳥取大学工学部海洋土木工学科だった。「正直、自分の学力にあった大学、学科を選んだだけ。普通の土木工学科もあったが、漁師町に生まれ育ったので、なんとなく〝海洋〟の付く方にした」と話す。

中崎さんが大学生活を送っていた当時、日本全体がバブル景気に沸いていた。建設業界もしかり。「非常に景気が良く、同じ研究室の学生の大半が建設会社に就職を希望していたので、自分も」と考えていた。

結局、兵庫県に本社を置き、東北地方や関東地方などに支店・営業所があるゼネコンに就職。「兵庫は岡山の隣りなので、実家から近くて良いと思った。できれば関西地方で働きたかった」。

ところが、研修を終えて配属されたのは東京支店だった。都内の下水道や地下鉄の車両基地、山梨ではリニア実験線などの現場を歩いた。希望の関西ではなかったが「特にリニアの現場は非常にスケールが大きく、土木の魅力を感じた。新しい交通システムのプロジェクトに携わっているという、わくわくした気持ちもあった」と技術者としての血が沸き立った。

現場で重機のオペレーターに指示を出す中崎さん

由良地区横断管渠修繕工事の現場

### 全国を渡り歩く生活に終止符

人生の転機が訪れたのは、日本下水道事業団の鶴岡市浄化センターを建設するため、鶴岡市に転勤した時だ。友人の紹介で三浦土建の令嬢と知り合い、結婚したのだ。鶴岡市内に居を構えたが、工事が終われば次の現場に渡り歩く生活で、単身赴任も何度か経験した。

約13年前に「家族みんなでずっと鶴岡で暮らそう」と決心し、勤めていたゼネコンを退職。奥さんの実家である三浦土建に入社した。

### 現場所長は一人二役三役

転職後、最初の現場は鶴岡市内を流れる赤川の樋門・樋管の補修工事だった。ここで初めて現場代理人（所長）を経験した。「前の会社では所長からの指示を受けて、その通りに動けば良かった。いざ自分が所長になってみると、現場全体を見て、安全管理や工程管理、発注者との協議・打ち合わせなど、一人二役三役をこなさなければならず、苦労した」と語る。

それでも「絶対に事故を起こさず、工期を守る」と強い意思を持ち「作業員みんなと良く話し合いながら工事を進めた」結果、無事故で工期内に完成させることができた。

「頼りない所長だったかもしれないが、みんなが頑張ってくれた。これまでにない達成感を味わった」。

### 規模は違うが大手も地元も仕事は同じ

その後、現在に至るまで鶴岡市内を中心に数々の現場で現場代理人を担当。「前に勤めていた会社とは、工事の規模が違うだけ。現場でやるべきこと、やらなければならないことは大手企業にいても、地元企業にいても基本は変わらない」と感じている。

「逆に地元企業ならではの良さがある。自分が携わった現場をいつでも見ることができ、子どもたちにも自慢できる。全国を渡り歩く会社ではなかなか難しい」

東日本大震災では、発災直後から被災地の地元建設企業の社員らが自分たちの危険を顧みず応急復旧に尽力する姿に共感を覚えた。

地元建設企業は、地域のインフラ整備だけでなく、大規模地震や豪雨、台風などの自然災害が発生すると、真っ先に現場に駆け付ける。「建設業は地域にとって、なくてはならない業種であり、そこに誇りがある。これから建設業に就職しようと思っている若い人たちも、その誇りを持ってほしい」と呼び掛ける。

思い出の現場

GOOD JOB!

### 新五十川橋補修工事

橋の寿命を延ばすための補修工事で、コンクリートの中の鉄筋がさびないように電気を通して腐食させない工法を採用した。前の会社にいた時も経験がなく「こういう工法もあるのかと、勉強になった」という。「さまざまな経験や勉強ができることが技術者の魅力だ」と強調する。

技術者物語

# 福島

## 愛する地域の復興に全力尽くす

### 庄司建設工業株式会社

相馬営業所係長

**鈴木　善行**さん

本社　〒975－0039 福島県南相馬市原町区青葉町 1－1
TEL 0244－22－1111　FAX 0244－23－4391
URL http://www.shojicon.co.jp/

### 『ショックだった』無残な光景に立ち尽くす

「ショックだった」。2011年 3 月11日。東日本大震災に伴い発生した、予想を遥かに上回る大津波は、福島県相馬市の沿岸地域一帯を飲み込んだ。直後から被災個所の調査に回った鈴木さんは、現場を目の当たりにして大きな衝撃を受けた。「今まで諸先輩や自分が苦労して完成させてきた公共施設が、見るも無残な光景と化した現場を見て、呆然と立ち尽くした」。

鈴木さんは、相馬市の港町で漁師の家の 3 人兄弟の末っ子として生れ、風光明媚な松川浦などを遊び場に育った。地元の相馬高校を卒業し、東北工業大学に進学。毎日、相馬の自宅から約 2 時間かけて仙台市郊外のキャンパスに通った。

### 『自宅から通える』大学も会社も地元志向

入学時には職業に対する意識はさほどなかったが、大学時代に建設現場でアルバイトを経験。「臭く汚いドブ川が、自分なりに一生懸命作業した結果、きれいなコンクリートの水路に生まれ変わったことに感動した」。この体験に加え、「地元建設業に入れば実家から通える」との思いも後押しし、1986年 4 月、相馬市に隣接する原町市（現南相馬市）を本拠とする庄司建設工業に入社し、相馬営業所勤務となった。

入社当時は公共投資が右肩上がりで伸びており、ほとんど休めないほど多忙だった。中でも相馬港は 5 号埠頭の工事が最盛期。鈴木さんも「何もない水平線の上に船で行き、ケーソンを作ったり据付けたりした」と地元・相馬港の整備に従事した。この工事を皮切りに、これまで携わった現場のほぼ 8 割が海上工事だという。

現場代理人として四半世紀近いキャリアを積んできた中、〝その日〟が訪れた。震災当日、娘さんの卒業式で仙台に滞在していた鈴木さんは、発災後すぐに相馬を目指して車を走らせた。途中、浸水による通行止めのため、宮城県境の避難所で一夜を明かし、朝を待って再び急行。ようやくたどり着いた鈴木さんの目に信じられない光景が飛び込んできた。

津波により甚大な被害を受けた相馬市沿岸部

### 震災翌日から復旧作業に邁進

生れてから一度も離れたことがない、愛する故郷。その故郷を美しく、豊かにするための社会資本整備に携わる喜びと誇りを胸に、直向きに仕事に取り組んできた。その、自らの汗の結晶とも言える相馬港が、そして子どもの頃に遊び場だった風光明媚な松川浦が、津波で壊滅的な被害を受けていた。高台にあった自宅は無事だったが、平坦な沿岸部にあった営業所は 1 階が浸水した。津波にさらわれた父親が大怪我を負いながらも九死に一生を得るなど、家族が全員無事だったことが唯一の救いだった。

それでも、その日のうちに相馬営業所の仮社屋に駆け込み、即座に道路啓開のためのがれき撤去や、冠水した田んぼの排水作業などに24時間態勢で取り組むなど、休むことなく作業に邁進した。

最近は、発災直後からの応急復旧作業は落ち着いてきたものの、震災復興工事の大量発注で忙しさにはさらに拍車が掛かっている。「とにかく、今は地域を復旧させたいという一心で取り組んでいる」。地域愛と土木技術者としての使命感が、激務を乗り越える原動力となっている。

### 地球上に〝生きた証〟刻む

被災地の最前線で復興を担う中、頭をよぎるのは建設業と被災地の将来だ。「現在の建設業界は人材が不足している。震災でズタズタになった被災地を立て直すためには若者の力とひらめきが必要だ。建設業に興味のある人は、今すぐにでも参加してほしい」と呼び掛ける。

若者に強く薦めるだけの理由がある。「10メートルを超えるケーソンを何もない海上に運び、陸地をつくるなど、とにかくスケールが大きい」。そして「苦労して完成させたものが、半永久的にみんなに使われるという仕事は建設業以外にない。この地球上に自分の生きた証を刻むことができる」。

復興への階段を少しずつ上り始めた被災地に鈴木さんが残す〝生きた証〟こそが、建設業を志す後進の道標になる。

復旧工事を行っている相馬港での 1 コマ。『地域の復興』だけが願いだ

### 思い出の現場

#### 滝川ダム仮排水路工事

GOOD JOB!

担当現場の 8 割が海上工事。トンネルや発破の経験がほとんどない中で現場代理人に抜擢されたが、台風による増水などで坑内に何度も水が流れ込んだり、検査時にクラックが見つかるなど、苦労の連続だった。ようやく迎えた竣工直前に体を壊して入院。「全然良い思い出がないからこそ忘れられない」という。

発 行　東北建設業青年会

〒980-0824 宮城県仙台市青葉区支倉町 2-48（宮城県建設産業会館 5 階）
TEL 022-263-9271　FAX 022-268-4293
URL http://www.miyakencenter.or.jp/rengoukai/sub2-5.htm